

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

再版

B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 水原秋桜子編 二三〇〇円

### 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かした句作にも役立つ

## 大後美保編 二八〇〇円

### 季語鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

## 中村俊定監修 四五〇〇円

### 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す



# 季刊 連句 第23号

- 国語学大辞典 B5-1 九〇〇〇円 国語学会編
- 国語慣用句大辞典 A5 六二〇〇円 白石大三編
- 国語慣用句辞典 B6 二二〇〇円 白石大三編
- 国語史辞典 B6 三三〇〇円 林巨樹他編
- 日本語源辞典 B6 三三〇〇円 堀井孝以他編
- 京都語辞典 B6 一八〇〇円 井之口・堀井編
- 擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇円 天沼 幸雄編
- 隠語辞典 B6 二八〇〇円 堀井孝以他編
- 近世上方語辞典 A5 一五〇〇〇円 前田 昌雄編
- 花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円 堀井孝以他編
- 明治新語俗語辞典 B6 三三〇〇円 堀井孝以他編
- 難訓辞典 B6 二二〇〇円 中山 幸雄編
- 名乗辞典 B6 二二〇〇円 堀井孝以他編
- 名数数詞辞典 B6 五五〇〇円 堀井孝以他編
- あいさつ語辞典 B6 二二〇〇円 奥山益朗編
- 新版 ことば遊び辞典 B6 六三〇〇円 鈴木 幸三編
- 類語辞典 B6 一八〇〇円 鈴木 幸三編
- 類義語辞典 B6 一三〇〇円 徳川 宣彦編
- 表現類語辞典 B6 四八〇〇円 藤原孝一他編
- 新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円 神島 村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-233-3741~2

北枝の墓(南柏雜記 21) ..... 1  
 岩木の臭き宿(『春の日』) ..... 佐藤 廣幸 ..... 2  
 「鳶の羽も」の巻 鑑賞(II) ..... 東 明雅 ..... 4  
 第五回 武翁賞発表(昭和六十三年度) ..... 9  
 「蓑虫」付勝練習二十韻 ..... 12

第八回 俳諧芭蕉忌 第二十七回 猫叢会 ..... 14  
 正式俳諧興行 脇起り二十韻 葱白く 杉江 杉亭 捌  
 二十韻 六卷  
 捌 梅田 利子 小川 弥生 上月 淳子  
 下坂 元子 下鉢 清子 八角 澄子  
 文 福井 隆秀 瀧川 雅代 金久保淑子

句を付け合うという人間関係 ..... 矢崎 藍 ..... 20  
 一連句と人生の楽しい未来を信じて一  
 ころも俳諧 歌仙 虚空 ..... 捌 矢崎 藍 ..... 22  
 連句法楽 ..... 福井 隆秀 ..... 23

おくのほそ道紀行 II ..... 下鉢 清子 ..... 24  
 歌仙 二巻 ..... 捌 秋元 正江・式田 和子  
 膝送り 二十韻四巻  
 新山中三吟 歌仙(秋元 正江・坂本 孝子・式田 和子)  
 両吟 二十韻一卷(坂本 孝子・大窪 瑞枝)

柏連句会 二十韻二巻 ..... 捌 東 明雅・五十嵐讓介 ..... 28  
 大和便り ..... 佐藤 廣幸 ..... 29  
 雁帛往来

表紙(昇り龍) 宮崎 龍火子

# 北枝の墓

南 柏 雜 記 21

雅

一泊二日のあわただしい北陸路の旅、金沢では有名な願念寺の一笑の墓、成学寺の蕉翁墳、山中温泉では芭蕉が泊った泉屋の跡地、それから有名な那谷寺、さらに足をのばして齊藤実盛首洗いの池、全昌寺まで廻った。三百年前、翁がとぼとぼと辿った道がすっかり舗装され、その上をタクシー三台に分乗して行ったのだから、本当の翁の旅を味わうには遠いだろうが、それはやむを得ないところだ。

十月四日、午前十一時半金沢駅に着くと、「寒雷」の同人山本一糸さん、平本微笑子さん、才川道子さんがお出迎え下さって、御案内して下さったのは恐縮であった。

二台のマイクローバスで出発、やがて到着したのが、この山の上町の浄土宗寺院心蓮社であった。寺の後の墓地にすぐ北枝の墓がある。とむろ石(戸室石)で築いた大きな墓には「趙北枝先生」と刻まれ、享保三年二月十二日とその忌日が記されている。北枝は小松の生まれであるが、金沢に移住して、研刀を業とし、金沢蕉門の始祖となった人、「おくのほそ道」の旅の芭蕉を迎え、山中温泉に同行して翁の教を受け、有名な「山中三吟」を残した。

わが俳諧伊勢派は芭蕉から北枝へ希因へ関更へ蒼虬へ芹舎へ凌冬へ芦丈と流れて今日に及んでいる。いわば流派の始祖として平生も尊崇していたが、今、このように掃苔する事が出来て満足であった。

驚いたことには、伊勢派三代目の高桑蘭更の墓も、北枝の墓のそばにちゃんと残っていた。この墓は北枝のほど高くないが、「峨山軒孤月關更禪門」と彫った墓石の上には庇みたいな石が冠っており、これは格式ある町人でなければ許されぬものという話であった。

この心蓮社は金沢卯辰山の麓にある幽邃なお寺である。御住職の案内で座敷に上がり、お茶をいただいたが、座敷から見る築山池泉式庭園は、なまじい人工を施してないために、すばらしい景観であった。さほど大きくない池を巡って、三百年以上経ったといわれるタブの木、つくばねがし、羅漢槿などが鬱葱と茂り、建物の軒にはしのぶ草が生い茂っていた。池畔の石には田螺が日向ぼっこをし、夏の頃は螢が飛び交い、もりあおがえるが卵を産むそうである。私はしばらくこのような風景に接しなかった。五・六十年前、日本はまだ貧しく、そのかわり美しかったころの田園風景がタイムカプセルから取り出されたように、ここに残っているのには感動した。

# 岩木の臭き宿（『春の日』）

佐藤 廣 幸

三月十六日且葉が田家に泊りて  
蛙のみ聞いてゆゝしき寝覚かな

額にあたるはる雨のもり

蕨烹る岩木の臭き宿かりて

まじまじ人を見たる馬の子

立て乗る渡しの舟の月影に

蘆の穂をする傘の端

野水  
且葉  
越人  
荷兮  
冬文  
執筆

右は『春の日』の「蛙のみ」の巻の表六句である。この歌仙が巻かれた貞享三年の春は、芭蕉は江戸深川の芭蕉庵にいて、尾張で興行されたこの歌仙の席には出ていなかった。しかし貞享元年の『冬の日』の成功に気をよくした荷兮など、名古屋の連衆が、芭蕉の後見を得て編んだ『春の日』は『冬の日』の姉妹篇に当るので七部集の第二集となった。

この歌仙は野水の発句の詞書が記す通り、貞享三年の春、三月十六日、名古屋近郊の且葉の別邸に連衆を招き、同夜そこに一同泊り込み、翌十七日に巻かれた一巻である。この歌仙が初折の裏六句目にかかるころ、夜も次第に更けて

きたので、その日はそこで打切り、裏の七句目以降は、十九日に席を改め、名古屋の荷兮宅で同じメンバーによって引継がれた。

発句は主賓の野水が詠んだ。且葉の別邸は水田に囲まれた田園地帯の屋敷であったのだろう。連衆の休む枕許近くまで蛙の声がよく聞こえてきた。発句の「ゆゝしき」は素晴らしいの意で、且葉別邸を讃めて詠んだ挨拶の句である。これに対して、亭主の且葉は、春雨の雨漏りさえこんな陋屋によくぞお泊り頂いたと謙遜して客を迎えた歓迎の意をこめた脇の句で応じた。第三を受持った越人は想を改めて、人里離れた貧しい旅籠を点出し、その宿のさまを描いた。越人の付句は恐らく名古屋から遠くない山里での体験を基にした写実的な句であろうと思われる。というのは、名古屋近郊には、この句に描かれているような岩木を産出するところが珍らしくなく、名古屋に在住する人達には、

この事実がよく知られていたものと思われるからである。岩木に関する認識は連衆にとつての共通認識であったと思われる。馬場錦江の『七部集通旨』（嘉永五年）には、この岩木についての詳細な記述があり、古註の中でも最も精

細な註釈となっている。

尾州名所図繪愛知郡岩作村の辺及び春日井郡水野山中の地下に是を産す。地に入る事五六間にして此物あり、其質石より柔かに土よりはかたく木に似て非なり。故に土俗岩木と称す。其色黒く日を経て乾く時は赤みあり。わたり五十間百間又は際限をしらざるもあり。長短に至りては更にはかりがたし。幹の中に花ひらきくるみのごとき実を結ぶ。民家は是を薪にかへ炊爨に供す。聊か臭気あれば府下には用ひずといえり。佗しき宿りの体二句の間に餘情懸かたし。又江州八幡辺湖中よりも出すよし近江輿地志に見えたり。此集尾州の巻なれば他に尋ねるに及ばざる歟。

実に詳しい註記である。私は戦後間もない昭和二十一年ごろの物資の極度に乏しいころ、ここに記されている愛知県春日井郡から遠くない、中央線沿線の岐阜県の瑞浪から奥に入った山村の、小さな泥炭を採掘していた鉱業所を訪ね、その採掘現場を具さに見学した経験があるので、右の錦江の活き活きた記述には特に注意を惹かれたのである。当時、敗戦により国土は想像を絶する荒廃ぶりであり、ちょっとした旅をするにも配給米や雑穀を手製の布袋に入れて携行した時代であった。勿論当時燃料も不足していたので、都会からの泥炭の需要もかなりあり、こうした状況の下に泥炭の鉱業所も稼動していたのである。ここでは露天掘に

よる採掘が行われていた。その泥炭の採掘現場には我々の背たけにもならない深さの凹みに炭層が走っていた。泥炭は樹木の樹皮や木の葉などが太古地下に埋没したところに土壌が積み重なり、その重みに圧縮されてきた炭層であるため、完全に炭化したものはなく、その一片を手にとってみると、表面には木理を残したものも見られ、木の実や枝、虫などいろいろな不純物が混じっていて、手で割ると扁平状に簡単にさける。右の『七部集通旨』の「其質石より柔かに、土よりはかたく、木に似て非なり」という記述にピッタリの形状であった。名古屋の連衆にはこの岩木の宿がよくわかっていたのである。「臭気あれば府下には用ひず」と錦江の註にもある通り、江戸時代でも異様な悪臭を放つところから都心では薪炭の代用として使用されなかったであろう。

暁台の『秘註俳諧七部集』には、「岩木ハ伊賀ニテ雲丹ト言物ト同ジ。諸國ニ多シ」と註する通り、芭蕉の故郷、伊賀でも産し、ウニと呼ばれ実用に供されていたことが、服部土芳の『横日記』の元禄元年の條で明らかである。

伊陽山家にうにといふ物有。つちのそこよりほり出て薪とす。石にもあらず木にもあらず、黒色にしてあしき香あり。そのかみ高梨や、是をかゝなへて曰、本草に石炭と云物侍る。いかに云傳へてこのくにのみ焼ならばしけん。いと珍し。

かに、ほへうにほる岡の梅の花 翁 此一紙、我草

庵に残る。

私もその泥炭の一片をとって火に投じてみた。煙を出し  
くすぶり、豆炭のような臭いを出し、いやな臭いは部  
屋中に拡がる。これでは都会で薪炭の代りに使われぬ筈  
である。戦後の燃料にも困った時代であったればこそ代用  
燃料として需要もあったのである。越人の第三は、近くの  
原野でつんできたわらびを煮て惣菜か、蘇汁をつくるのに、  
岩木を燃料に使うといえ、山家の質素な生活が目に見え  
てくる。雨漏りが額に当るといふ陋屋の前句の趣きから、  
岩木を燃やし食事の支度をやる山家の宿の様子を付けたの  
である。荷兮の四句目は、前句の景にふさわしい、家近く  
に放牧されている仔馬を描いた。その仔馬に近づくと「ま  
じまじ」人の顔を見るといった、人なつっこさを描いて見  
せた仲々おもしろい句である。荷兮にしては珍らしい写真

## 「鳶の羽も」の巻 鑑賞(Ⅱ)

東 明雅

前号に鑑賞Ⅰを書いたあと、矢島房利氏より、次のよう  
な蕪村の句を教示された。

笠船を刷ひぬはるの雨(蕪村遺稿稿本)

右は碧梧桐「蕪村新十一部集」に収められている。これ  
によると、「はるの雨が笠船を刷ひぬ」ということになり  
「初時雨が蕪の羽も刷ひぬ」の意に、蕪村は解していたら

的な句である。五句目の冬文の付句は月夜の川の渡ししの景  
に転じた付けである。渡し舟に、「たつて乗る」というの  
が、山村の渡しの実態をよく捉えている。六句目は雨降り  
の景に転じて付けた。雨中を舟が蘆荻をわけて進むとき、  
さしていた傘のはしに濡れた穂が触れて水滴を散らすさま  
を付けた素直な句である。「する」はこするの意である。

越人の「岩木の臭き宿」から、敗戦直後の四十二年前の  
苦しい時代を思い出し、その時訪ねた美濃の侘しい山村の  
印象が実に生々しく記憶に蘇り、この「蛙のみ」の歌仙  
の表六句を自己の体験に重ね合わせて眺めてきたが、『冬  
の日』の五歌仙とはだいぶ趣きが違い、地方の農山村の実  
景がおだやかに描かれている感じがする。私には、「岩木  
の臭き宿」からは、草深い美濃の山村の風土の匂いが今も  
強く感じられてならない。

しいことが推察される。有力な証句である。

しかし、私は「続芭蕉俳諧研究」で山田孝雄氏が言っ  
ておられるように、「はつしぐれ」をあまり直接に「蕪  
」の上にかけない方がよいと思う。「蕪の羽も刷ひぬ」と「は  
つしぐれ」との関係は、いわば前句と後句との関係として  
解する方が、はっきりこの句が二章体となり、丈高くなる

のではないかと思うからである。

2 蕪の羽も刷ひぬはつしぐれ

一ふき風の木の葉しづまる

(冬。木の葉。人情無)

(現代語訳) 一陣の風に散り散りの木の葉もおさまって、  
蕪は初時雨に濡れた羽をかいつくろって、梢にとまっている。

(付心) 付心というのは、前句と付句との二つが、どの  
ような関係で付けられているのだろうか、その点を探るこ  
とである。A句にB句を付けるという場合、どんなところ  
が二つの句をつなぎ合わせるきずなになっているのか、そ  
れを知ることが、俳諧(連句)鑑賞の第一歩である。だか  
ら、これから、毎句ごとにまず、その句の付心について説  
明するつもりである。

この脇句は、発句に言い残した、あたりの景色を軽く付  
けたもので、このような付け方を会釈の付けと言ひ、また、  
其場の付けともいう。

(付味) 前句と付句とが、うまく付けられているかどうか、  
その判定が付味の吟味である。

この脇句は高井几童(一七四一—一七八九)が、名著「付  
合てびき蔓」(天明六年、一七八六)に「ワキは、初時雨に  
一吹風と付て、切木葉というが、蕪への結びにて、しづま  
るとせしが、かいつくらふといふにあはせて、一句の作也。」  
と言っている通り、

初しぐれ——蕪——刷ひぬ

一吹かぜ——木の葉——しづまる

このように両句の内容が対になっており、それぞれがよ  
くうつつりあい、響き合っている。

費川他石氏は、ひびきの付けであるとはっきり言明して  
いる(「連句私解」)し、樋口功氏は「其の景の脇なり。  
凄風枯條を吹いて、さっと一時雨過ぎし後の寒曠悲寥の天  
地。十四文字に活現し、口気霜を生ずるを覚ゆ。稀有の名  
脇句と謂ふべし」(「芭蕉の連句」)とまで激賞している。

(補説) 服部上芳(一六五七—一七三〇)の「三冊子」  
(一七〇九ごろ成)に、この付合について、「木の葉の句  
は、発句の前をいふなり、脇に一嵐落葉を乱し、収りて後  
の蕪のけしきと見込みて、発句の前の事をいふなり」とい  
う説明がある。

このような関係を逆付と言って嫌うというが、発句と脇  
句とに表現された内容を、時間的関連で見た場合、他にもこ  
のような例は多く、また、この句に限って言えば、一陣の  
風が時雨を伴って過ぎて行つたと、同時に解するのが自  
然である。

さらに細かなことを言えば、「一ふき風」という語につ  
いてであるが、これは一しきり吹く風、一陣の風として、  
「日本国語大辞典」(小学館)にも、この句を例にして出  
してある。

昭和になって「続芭蕉俳諧研究」あたりから、一ふき  
で切つた方がよいという意見が現われ、賛成者が多い。そ

の理由は必ずしも明確でないが

一ふき・風の・木の葉しづもる

と読めば、リズムに特別のものが感じられ意味も深みがあると思われるからであろう。

だが、先にあげた「付合てびき蔓」でも、几董は「一吹風」と読んでいるようだし、芭蕉がどう読んでいたかは分からない。

木の葉は初冬の季語、「増山之井」には「貞徳云、枝に有て散らぬ句体ならば雑なるべし」という注があるように散って行く状態をさす語である。その点、散って落ちていく状態をさす落葉とは区別して用いる。

3

一ふき風の木の葉しづまる  
股引の朝からぬるゝ川こえて

芭蕉  
凡兆

(雑。人情目)

(現代語訳) 木の葉を吹きちらしていた風もおさまったが、この寒い朝、自分は股引をぬらして、川を徒わたりするのである。

(付心) 発句と脇とが、ともに人間の景情の全くない人情無の句であった。この句は、前句の景色から、小川を徒わたりする男の姿を出した。このように人情無(場の句)に、その場になかった人情の句を付けるのを、起情の付という。

(付味) 前句を川辺の景と見て、その川を徒渉する人

であろう。

第三は留め方に一定のきまりがあり、て留め、にて留め、らん留め、もなし留めなどが普通に用いられる。この句は、て留めが用いられている。

4

股引の朝からぬるゝ川こえて

たぬきをゝどす篠張の弓

凡兆  
史邦

(雑。人情目)

(現代語訳) 朝から股引をぬらして川を渡り、狸の獲物を見廻りに行く。

(付心) 前句の川を渡る人を農夫と見て、その人の用を付けた。このような付けを其人の付と

(付味) 狸は夜出て活動する。もし民にかかっていたら他人に見つけられぬ前にはやく処分しなければならぬ。だから、その見廻りに行く人は、川をわたって急ぐので、前句の景情とよく似あっている。また、股引という語は何かユーモラスな気分がある。その気分は狸という語は何か動物にも通うところがある。

(転じ) 打越の脇句が、寒々とした風の景であったのに対し、この句は同じく淋しい山里の景でありながら、狸をおどす人物の登場、また気分にも何かユーモラスなものが感じられ、よい転じになっている。

(補説) まず、狸は今日では冬の季語となっているが、江戸時代は無季として取扱われているのは、前句の「股引」

付けたのであるが、前句にある冷気の気分が「朝からぬるゝ」という、寒さを厭う情にひびいている。

(転じ) 俳諧(連句)は、前句に付くだけでなく、その一句前の句(打越)から、全く別のものに転じなくてはならぬ、A句にB句を付け、そのB句にC句を付けた時、Aが打越、Bが前句、Cが付句ということになるが、このBを挿むAとCとは、全く関係がなく、また、はっきり別のものでなければならぬ。これを転じと言う。転じは付けとともに俳諧(連句)一卷進行のメカニズムである。打越の発句は、初時雨と鳶の姿を出し、忙びと寂びの景を叙べているが、それに対し、この第三は朝の景に転じ股引を濡らして川を渡る旅人の景情を描いている。発句はまさに墨絵の世界であるが、第三は広重の浮世絵にも見られるように近世庶民の姿が写されている。ただし発句の鳶もこの第三の旅人も、何か濡れて冷たい気分と情景が続き、その点ではあまり転じていない。

6

と同様である。

ところで、その狸をおどす張弓とはいかなるものであろうか。旧解の多くは、この張弓を単なる竹の弓、あるいは幸田露伴の言う「ぶっぱたき」の類と考えている。

篠の強きを地に生ひたるまゝ、撥め伏せて弓の如くに張り、樹の枝椏などもて土に縫ひつけ置き、すこしく之に觸れば、機発して俄然として觸れたるところのものを弾き撃つやうにするものを云へるなり。狸狐兔などの類、皆これをもて威し畏れしむべく(中略)、今の語にぶっぱたきと云。(幸田露伴・「評釈猿蓑」)

しかし、この露伴の説は不十分であり、この篠張の弓に、最も正しい解釈をしたのは、天野雨山氏で、その著「猿蓑連句評釈」に次のように教えている。

「好色一代男」巻四の三「夢の太刀風」に、最上の寒河江に世之介が宿する条に、  
夜更け主は古き葛籠を明けて、鳴子・張弓取り出だし、  
「近の山陰に狸の限りもなく暴れける、これを捕へて鬻にせまほし」と出て行く。

とある「張弓」は、「和漢三才図会」巻二十三「魚狸、彈の条に、

按狐彈作彈弓、用油熬煎、置機械、中則喜香果終保彈(以下略)

右の文章によって、「篠張の弓」の正体がはじめて明らかにされたものと言ってよいであろう。即ち、「篠張の弓」は篠竹で作って、狸を獲るための弾

7

き弓を言うのである。「狸を獲る」と言わないで、「ためきを<sup>おどす</sup>」と言ったのは、「是非獲るといふ程ではなく、懸っても懸らなくてもよく、威し半分に懸けて置くといふ意で使ったものと思はれる」と雨山は説明しているが、その点も賛成である。

四句目は軽く作るというのがならわしであるが、この句は景情ともに軽くて、申し分のない四句目ぶりである。

5

狸を、どす篠張の弓  
まいら戸に薦這かゝる宵の月

蕉 邦

(秋。月。人情無)

(現代語訳) この邸は荒れ果てて、藪陰には、狸をおどす篠張りの弓が仕かけてあり、まいら戸には軒の薦が這いかかって、夕月に照らされて影をおとしている。

(付心) 前句の狸畏のしかけてある場所の様子を描写した句であるから、其場の付である。

さらに、歌仙の第五句目は月の定座と言って、一心こまでに月の句を詠むことになっている。ここはその定座通りに月を出した。月・星・雨・風・晴・曇など空にあるさまざまな現象をもって付けるのを「天相」の付と言う。

(付味) 荒れ果てた邸とそれを照らす月、そのすさまじさは、前句の狸の出る山里の荒涼さに、よく響き合っている。

(転じ) 打越の股引の句あたりからすこし庶民的に、俗

にくだけていた景情が、まいら戸によって品格のある境地に転じた。さらに、このまいら戸を出すことによって、発句からずっと家の外の景ばかりが続いていたのを、ともかくも家の内の景に転じ得たのである。

(補説) 「まいら戸」は、表面の左右の框の中に、横に棧をびっしり打ちつけ、多くはそれらを黒漆に塗った戸で、主として書院造りの玄関に用いるもの。寺とか邸宅など格式ある住居にあるもの。

「薦這かゝる」は、廃屋の有様を述べたもので、実際に、まいら戸に薦がまきついていると見るよりは、月に映る軒の薦の影が、まいら戸まで及んでいると見る方が、空の宵の月影が一そう生きて感じが深まる。

「宵の月」普通の月でなく、わざわざ「宵の月」と指定したのは、宵の間の浪漫性を強調したものであり、「狸の妖魅気分には宵の月は動くまじ」(「芭蕉の連句」樋口功)とあるが、私はむしろ「艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづ思しいでおはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎたまふ」(「源氏物語」蓬生の巻)などを面影(直接に故事をそのまま取らず、それとなく古典の情趣を感じさせるような手法)にしたものではないかと思う。この句は丈高いとともに、一種の花やかさがあり、いわゆる「猿蓑調」の代表的な句の一つであると思う。「朝からぬるゝ」と時分の打越であるが、異時分であるため許されよう。

## 第五回 武翁賞発表 (昭和六十三年度)

歌仙 荻の風

米谷 貞子 捌

賞状 副賞 金五万円

山口 みづゑ ・ 坂本 孝子  
大窪 瑞枝 ・ 雑賀 遊

二十韻 該当作なし

### 選考委員

東 明 雅  
草 間 時 彦  
杉 内 徒 司

### 武翁賞応募 作品一覽

歌仙 連衆

七 夏空 暗吾捌 翳雉・桃籬・惠洲・風人・信子

一 行春 膝送り 和世・玲子・喜代子

八 風の道 千町捌 櫻晴・隆秀・正江・千恵子

二 卒業や 正雄捌 瑞枝・淳子・孝子・弘子

九 荻の風 貞子捌 みづゑ・孝子・瑞枝・遊

三 梅雨晴間 膝送り 淳子・みづゑ・正雄・遊・孝子

二十韻 連衆

四 青齒朶 天留子捌 元子・麻子・淑子・隆秀

五 淡影 暗吾捌 惠洲・翳雉・信子・蹴石・風人

六 濁江 翳雉捌 暗吾・信子・涕鯨・風人・桃籬

・ 幸子・蹴石

1 夏燕 膝送り 孝子・弘子・瑞枝・淳子・みづゑ

2 鴉外の碑 千町捌 郁子・千雪・光子・讓介

3 せせらぎ 千町捌 庸子・讓介・惠美子

4 藤波 千町捌 みづゑ・好敏・栄子・一恵・天留子

歌仙 萩の風

米谷 貞子 捌

萩の風杖身にそへて来りけり

やすらふ窓ににほふ宵月

威銃獣は山にひそむらん

立体交差市道国道

若者は缶ジュース好き夏炎ゆる

手を借りて脱ぐ汗のTシャツ

沛然と降る夕立に濡れそぼち

稽古帰りの江戸前の寿司

軽いキスサービス料はたつぷりと

抱かれて云ふ夢じゃないのね

甲子園戦ひすんで砂をつめ

葉はさみし時刻表繰る

胡同の奥まで照らす月寒く

酒にむせたか客の空せき

過去帳もコンピュータに打ち込まれ

黒光りする広き板の間

花万朶行幸を待てる御用邸

春のうまいの覚めしたそがれ

白子干す浜に子の名を呼びながら

嘴太鳥ぱつと飛び翔つ

デユカキストブッシュ競合ひ猛烈に

メーキヤップして厚くなる面

浮気妻はくろの位置を覚えられ

声おとしつつくどく電話魔

大都会ただ淋しくて逢ひたくて

こなごなになる蟬のぬけがら

瓢吹く棚も清しく宮大工

力いっぱいしほる雑巾

三日月に跨がり行かん銀河まで

土耳古ブルーの湖の朝冷

テールに葡萄の房の置かれあり

髪をかき上げ終る宿題

猫額の土地一族で争ひぬ

爺と婆とで摘まむ草餅

紙塑人形天平乙女花かざし

霞のどかに響く琴の音

遊

遊

孝

同

枝

孝

遊

孝

遊

遊

孝

遊

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

孝

遊

選後に

草間時彦

猫藪会の人達、ことにご婦人方の技術水準が上ったことに瞠目した。よく勉強している。技術水準は上ったが、エネルギーを喪失しつつあるように感じたのは小生のひがめであろうか。又、付句が理から生れてくるような傾向がある。これも残念だ。

歌仙九編のうち「風の道」「萩の風」の二編が優れていると思った。「卒業」も悪くないが、やや荒れている。「風の道」は榊晴、隆秀、正江、千恵子と第一級の作り手を揃えているにしては、作品に力がない。場の句というか、人情なしの句を多く用いているのは賛成だが、それらの句に切れ味がない。米谷さんの「萩の風」は一句一句に含まれている情報量が多過ぎるよう思うのだがどうだろうか。もう少し、言葉を惜んだ方が余情が生れると思う。「風の道」「萩の風」どちらが受賞しても違存はない。しかし、二作に賞を与える程ではないというのが、私の結論。

「淡影」「濁江」「夏空」は同じ顔ぶれで、新しい顔である。季の配列がおかしい。

その点を学び直せば、将来は期待出来る。七人の膝送りの作があったが、大人数の膝送りはお祝儀としてはよいが、作を競うものではない。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

授賞は見送りとなって残念であった。二十韻の部。「夏燕」の大辞典、飛行船の二句とも述詞を欠くため句意不明、編も一ヶ所あり、要するに指導者を欠く膝送り作品はダメである。連衆も精々五人までである。原田氏捌きの三作品からは「せせらぎ」を探る。これは五十嵐氏の句を多く採ったからであろう。

杉内徒司

歌仙の部。「行春」同じ面に植物、衣服の同じ句材があるのが難。立句も審査の対象にしたいと思っているので「脇起」が不満。「卒業」付方に難ある個所目につく。「梅雨晴間」膝送りの弊が出て起伏少いのがおしまれる。「青歯朶」桜井天留子氏はすでに受賞しているから除外。「淡影」「濁江」「夏至」の三作品は式目に難があって採らなかつたが、この川崎の鹿吟舎はこの十三年月例会を守り、作品集三冊を上梓していると聞いた。今後の精進を祈る。「風の道」現代センスに溢れた作品、残す。「萩の風」意地悪い目でみても瑕瑾目につかず、可也。以上の理由で、十三作品から「せせらぎ」「風の道」「萩の風」が予選パス。そして最終結論は別項の如し。





# 第八回 俳諧芭蕉忌

## 第二十七回 猫蓑会

恒例の芭蕉忌を十月二十三日(水)、深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳肅な中に和氣藹々と興行した。その後、二十韻六巻を首尾した。

参加者 三十六名

第一部 正式俳諧興行

脇起り二十韻

葱白く

次第(下記)

役割(次頁下記)

第二部 二十韻 六巻

- |          |         |
|----------|---------|
| (一) 小春日和 | 梅田 利子 捌 |
| (二) 紅葉散る | 小川 弥生 捌 |
| (三) 鯨日和  | 上月 淳子 捌 |
| (四) 汐の香に | 下坂 元子 捌 |
| (五) 芭蕉忌  | 下鉢 清子 捌 |
| (六) 終    | 八角 澄子 捌 |

- (一) 次第
- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
  - 二、配硯 (重ね硯を配る)
  - 三、供華 (花司)
  - 四、執筆呼出 (宗匠)
  - 五、文台捌 (執筆)
  - 六、俳諧興行 (知司挨拶のあと連衆付句)
  - 七、花前 (執筆)
  - 八、献香 (香元・宗匠)
  - 九、花の句披露 (宗匠・執筆)
  - 一〇、端作り (執筆)
  - 一一、吟声 (執筆)
  - 一二、文台返し (執筆)
  - 一三、挨拶 (知司)

葱白く

杉江杉亭 捌

葱白く洗ひ立てたる寒さかな  
冬構へする里の家々  
かしまり手習ひの子等並びあて  
スタンブペたと押さる郵便  
月澄める今宵つまびくバラライカ  
新酒を妻の盃に注ぐ  
秋拾半幅帯は貝の口  
小倉山より二尊院まで  
集合の時間にまたも間にあはず  
しゃっくりとめるまじなひは何  
瓢虫だましふはりと飛びたちし  
馬冷しある爺照らす月  
髪梳いて逢うてもみたき世之介に  
国際電話で送る睦言  
思ふまじ人の笑顔の又浮かび  
銀のメダルをとった体操  
病状は一進一退友見舞ふ  
雉の尾を曳き高き鳴き声  
神南備の千木勝男木に花吹雪  
春を惜しみて聞香の席

明雅翁 和子 淑子 啓世 隆秀 弘子 雅哲 弥生 清みづゑ 千町子 淳子 正雄 良子 よしえ 麻子 杉亭 執筆

(二) 役割

宗匠	杉江亭
脇宗匠	中川杉
副宗匠	中島啓
執筆	秋元正
知司	福井隆
副知司	市野弘
座見	矢島利
座配	雑賀房
花司	滝川雅
配硯	金久保
香元	式田和子

